

石見銀山を歩く

2007(平成19)年7月、「石見銀山」がユネスコの世界遺産に登録された。日本では14番目、産業遺構としてはアジア初だ。登録エリアは、銀鉱山跡と鉱山町、鉱山と港を結ぶ街道、銀を積み出した港と港町など広範囲にわたる。かつて、日本は世界的な銀の産地のひとつで、世界で産出される銀の約3分の1を占めていたとされ、そのうちのかなりの量の銀が石見銀山で採掘されていたという。石見銀山を歩き、世界に誇る産業遺構の魅力を伝える。



石見銀山遺跡は、島根県の中ほどにある大田市の広い範囲に分布している。その中心となる大森町は、JR山陰本線大田市駅から南西約11kmに位置する。

現在、一般の人が入ることのできる唯一の間歩で、石見銀山で「大久保間歩」に次いで大きい「龍源寺間歩」。天井や壁にノミの跡が生々しく残る。

輝く山

推古天皇のころの620年、石見国(島根県の一部)の山の頂上が輝き、靈妙仏が現れた。当時の人々はその間に銀が眠っているとはわからなかったが、鎌倉時代末期の1309(延慶2)年、周防(山口県)の大内弘幸が守護神のお告げによってその山に銀があることを知り、採取を始めた。南北朝時代の1352(正平7・観応3)年には足利尊氏の子・直冬がその山を手に入れた。しかし、当時は露出した銀を採るだけで、見えなくなると手を引いてしまった。その約200年後の1526(大永6)年、今度は博多の商人の神屋寿禎が、銅取引のため出雲へ赴く途中、日本海沖から光る山を目にした。そして当時、石見銀山を支配していた大内義興の支援を得て、山の中腹で銀を掘り出していった。銀の出るその山、すなわち「仙ノ山」の発見には、このようなさまざまな伝説が残されている。実際に山が光ったか真偽のほどは定かではないが、寿禎が本格的な採掘を開始したというのは事実である。



清水寺付近から見た標高537mの仙ノ山。鉱床がある銀山の中腹で、山中には建物が建っていたとされる平坦面が約1000あり、その周辺の岩盤には間歩への入口や空気抜きの穴がおよそ600ある。



人間が入ったとは思えない間歩への入口。仙ノ山には、このような名もついていない穴が無数にある。麓にあるこの間歩は比較的新しいものだが、その入口は1mに満たない。

る。そして以後、仙ノ山を中心に石見銀山の町が形成されていくことになる。

仙ノ山とその周囲には「間歩」と呼ばれる坑道が約600ある。その中で唯一公開されている「龍源寺間歩」を歩く。江戸時代中期、代官所直営の間歩(御直山)として操業されたもので、石見銀山で2番目に大きい間歩だ。

ノミの跡が壁や天井に生々しく残っている。天井は低く、屈まなければ進めない所もある。左右にはさらに奥深く伸びる細い坑道がある。鉱脈を辿って掘っていった「ひ押し坑」の跡だ。そ

の入口は人間が入っていったとは考えられないほど小さい。いまは照明で明るいのが、当時はサザエの殻に油を入れ、い草を芯とした弱い灯で照らしながら作業をしたというから、内部は煤塵や鉱滓で満ちていたのだろう。風を通すために水の流れる道を設けたらしいが、鉱夫の身体への負担は容易に想像できる。

寿禎の銀山発見の直後は、銀は仙ノ山山頂付近で採掘され、徐々に麓へと移っていった。山頂付近には切り立つ岩盤の隙間から奥深く続く間歩がある。初期は露出した鉱脈に沿って掘り



「龍源寺間歩」の入口。石見銀山では大久保間歩に次いで大きい坑道。全長600mに及ぶが、公開されているのはそのうちの156.7mで、通り抜けるために掘ったものを加えると270m。



龍源寺間歩の壁面にある直径1mにも満たない横穴。銀鉱脈に沿って掘り進んでいった「ひ押し坑」の跡で、左右の壁面に20数坑ある。100m下の「永久坑」に降りる竪穴もある。



間歩入口付近にあったシダ植物の「ヘビノゴザ」。『カナヤマシダ』ともいわれ、カドミウムや金銀銅などの重金属を吸収・蓄積するため、鉱脈を見つかる一つの指標となっていた。



間歩周辺や銀山地区、大森地区の至る所で見られる要石(かぬめいし)。この石の上で鉱石を砕いて粉にし、その後製錬された。



「温泉津沖泊道」の松山の道標。「右 銀山大森五 いつも大やしる(出雲大社)」の文字が刻まれている。



銀が製錬される直前の貴鉛(きえん)と、そこから抽出された銀。13gの貴鉛から得られる銀はわずか2g。

毛利元就が整備したとされる「温泉津沖泊道」の松山の石段。採掘した銀や住人のための大量の物資を輸送するのに不可欠だった銀山街道はほかに日本海への最短ルート「鞆ヶ浦道」、瀬戸内海へ抜ける「尾道道」がある。

進む「露頭掘」が行なわれたが、当時の採掘作業は江戸期よりもっと厳しかったに違いない。龍源寺間歩を歩けば、その厳しさを想像できる。

灰吹法の開発と争奪戦

採掘された銀は初期は製錬されず、銀鉱石のまま鞆ヶ浦(現大田市仁摩町馬路)などの港に運ばれ、博多へ送られていたが、1533(天文2)年、寿禎が中国伝来の銀の製錬技術を日本で初めて導入したことで、より効率的な銀の抽出が可能になった。それが「灰吹法」である。金銀を鉱石から一度鉛に溶かし、そこから金や銀を得る方法で、やがて全国に伝えられ、日本の銀産出に大きく貢献した。日本の銀は海外にも輸出され、大航海時代、ヨーロッパの探検家や商人がアジア諸国と交易する際に欠かせない銀貨の原料となったが、その多くが石見銀山の銀だった。

銀は軍資金としても使われたため、銀山をめぐる、大内氏、出雲国の尼子氏、安芸国の毛利氏といった戦国大名による激しい争奪戦が繰り返された。

数十年続いた争奪戦は1562(永禄5)年の毛利氏の石見国平定で治まったが、「山吹城跡」をはじめ、「矢滝城」や「矢筈城」「石見城」など、彼らが築いた城の跡はいまも数多く残っている。

石見銀山が世界遺産に登録されたの



日本海に近い平地部にある石見城跡。岩山山頂部を利用した城跡で、仁摩方面を守備するための重要拠点だったといわれる。



戦国時代から続く長安寺は、祭っていた毛利元就の木像が山口へ移されてからは廃れていった。幕末の1866(慶応2)年、進駐してきた毛利軍(長州軍)がそのありさまを見、本殿や門を寄進し、豊栄(とよさか)神社となった。

は銀採掘の遺構だけではない。銀の搬出に利用された「銀山街道」もその対象となっている。毛利氏が石見支配の拠点とした温泉津沖泊と銀山を結ぶ温泉津沖泊道もその一つだ。銀山の坂根口を出て西田、清水、松山を通り、途中分かれて温泉津沖泊に至る全長約12kmの



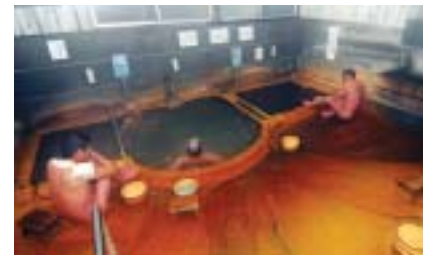
「御取納丁銀(おとりおさめちようぎん)」。1557(永禄3)年、正親町(おおぎまち)天皇即位の際、その費用を毛利元就が負担したが、これはそのとき献上したもの。表には刻印、裏には「銀山御蔵」「四拾三匁」の墨文字と花押がある。(鳥根県教育委員会蔵)



2004(平成16)年、温泉街として初めて国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された温泉津温泉街。右の「元湯温泉」が温泉津の元祖ともいえる共同浴場「元湯泉葉湯」。左の「長命館」は、その元湯泉葉湯を代々管理してきた伊藤家経営の旅館で、現在の館主は19代目。旅館に内湯はなく共同浴場に通うという昔の湯治場スタイルを維持している。

街道で、石畳や土橋、道標などがある。

温泉津の歴史は古く、934(承平4)年ごろに成立した『和名類聚抄』には「温泉津」(温泉という小村にある津の意)とあり、温泉津温泉「元湯泉葉湯」を営する伊藤家の『温泉記』では温泉津の発見はいまから1300年前の7世紀に



「元湯泉葉湯」の湯舟。朝の5時から営業しているが、すでに4時には地元の人々が浴場の前で話し込んでいた。泉源から1、2mほどしか離れていない湯は薄茶で、神経痛や高血圧に効果があるという。



温泉津で見た、岩を削ってつくった住居の跡。温泉津の町は、急傾斜の山の間の狭い谷筋に山裾を削ってわずかな土地を確保している。

遡るとされている。

温泉津は、江戸時代は幕府直轄領として隆盛を誇り、銀山衰退後は北前船による廻船業の地として繁栄した。港付近には廻船問屋だった屋敷もある。

現在は船の姿が少なくなった温泉津港から山側に伸びる温泉街には、13軒ほどの旅館が立ち並び、「元湯泉葉湯」に入ると、毎日来るといふ数人の地元の客が談笑していた。薄茶色の湯に体を沈めると、心までほぐれてくる。港に寄った商人や歴代の代官もきっとこの湯で疲れをいやしたのだろう。

一方の沖泊の港は、湾の入り口に櫛島があるため季節風の影響が少なく、大量の銀を積み出すのに適していた。おびただし数の船が停泊したのだろう、船の係留のために岩をくり抜いた「鼻ぐり岩」が数え切れないほどある。

幕府の支配と銀山の盛衰

毛利氏は、銀山と軍事的・経済的な要衝だった温泉津を直轄地とし、石見国の支配を続けていたが、1600(慶長5)年に終わりを告げることになる。関ヶ



大森地区の観世音寺から代官所跡方面を眺める。石州瓦の赤い屋根の連なりが美しい。



大森地区は、城下町のような身分による住み分けがなかった。このため、町家(左)と武家住宅(右)が混在している。観世音寺周辺で。

原の戦いに勝利した徳川家康が、その終結のわずか10日後に石見銀山を直轄地(天領)とし、重臣の大久保長安と彦坂小判部を石見に下向させ、毛利氏から銀山を接収したのである。

天領には代官所が設けられるが、石見の場合は大森町に置かれ、奉行や代官が交代で赴任した。その代官所跡のある大森地区を歩くと、住時を偲ぶこ



沖泊。毛利氏が石見銀山を支配した16世紀後半から、ここで銀の積み出しと石見銀山への物資補給が行なわれた。先端の両丘陵には軍事上の必要から築かれた山城跡もある。手前に見えるのが岩を丸く削った「鼻ぐり岩」。ここに船を係留する。港の両岸に多数あり、その数はほかの港よりも多い。



大森地区駒の足の町並み。江戸時代、2代目奉行・竹村丹後守（たけむらたんごのかみ）が代官所を現在の地に設置してから、その周りに役所や郷宿（ごうやど＝公用で代官所に来た人が泊る宿）が置かれ、さらに武家屋敷や町家が混在して町並みを形成している。



大森の町並みの北東側にある大森代官所跡。現在は石見銀山資料館として、石見銀山の調査研究、資料の保存管理・公開展示などを行なっている。



大森地区最大の商家・熊谷家。1500㎡の敷地に主屋と5つの蔵と納屋があり、その大規模な民家建築は国の重要文化財にも指定されている。



江戸時代末期の姿に復元された熊谷家の台所。大勢の人々をもてなしたのだから、大型の蒸籠や竈などが並んでいる。



熊谷家に展示されている秤。熊谷家は、家業である鉱山業や酒造業とともに、代官所に納めるための年貢銀を秤量・検査する掛屋（かけや）も務めていた。

とができる。岩の上に建つ、代官所の祈願寺だった「観世音寺」から下を眺めると、美しい石州瓦の屋根の連なりが見える。大森地区最大の商家「熊谷家」では、展示されている生活道具から、金融業や酒造業を営みながら町役

人や代官所の御用商人を務め、大森地区でもっとも栄えた商家の生活ぶりがうかがえる。

初代の銀山奉行となった鉱山開発経験のある長安は、公費による「御直山」

という銀山開発を積極的に行ない、銀の産出を活発化させた。なかでも、「釜屋間歩」を開発した安原伝兵衛という山師は、江戸時代初期、1年で3,600貫（13.5t）もの銀を年貢として納めたという。このころの石見銀の産出量は年間約1万貫（約38t）。世界の産出銀の約3分の1を占めていた日本銀のかなりの量を産出していた。

そんな隆盛の一方、多くの鉱夫が灰吹法の際に鉛の蒸気を吸い込み鉛中毒を発症した。坑道内の劣悪な環境下での作業の連続もあり、当時の鉱夫は短命で、平均寿命は30歳前後だったとされる。銀山周辺に寺院が多数あるのは彼らの供養のためだ。そんな寺の1つ、真言宗の「羅漢寺」を訪れた。境内の岩盤斜面に穿たれた窟に安置されている500体の石造羅漢坐像の前に立つとその数に圧倒される。よく見ると羅漢の表情はすべて異なる。ここに来れば、亡くなった近親者を見出せると、多くの人々が集まったという。

江戸初期に最盛期を迎えた石見銀山



大森地区の南端側にある信仰遺跡「羅漢寺」の岩盤と石橋（上）。石見銀山の石工技術が反映されている。岩盤斜面にある3カ所の石窟のうち、中央に石造釈迦三尊仏、左右両窟には250体ずつ合計500の羅漢坐像が安置されている。

は、中期には銀の産出量が激減した。末期の1833～43（天保4～14）年は年間平均19貫（約221kg）、1866（慶応2）年は12貫（約45kg）にまで落ち込んだ。明治維新後の1886（明治19）年には、藤田組（現DOWAグループの前身）が清水谷に新型製錬所を設置して操業するが、わずか1年半で休止を余儀なくされた。

その機能を永久製錬所に移したが続かず、1923（大正12）年、ついに休山に至った。戦後の試掘でも鉱量が少なく、鉱山としての石見銀山の役割は終焉を迎えた。

残った人々

石見銀山の歴史を綴った『石見銀山旧記』には「慶長の頃より寛永年中大盛土稼の人数二十万人、一日米穀を費やす事千五百石余、車馬の往来昼夜を分たず、家は家の上に建て、軒は軒の下に連り…」とある。20万という人口は当時の江戸のそれに匹敵するし、1日の米の消費量1500石は換算すると約200トンに及ぶ。しかし、閉山後の町は人口流出により徐々に寂れていった。にもかかわらず、現在この遺構を目の当たりにできるのは、残った人々が大切に守ってきたからである。大森町では文化財保存会を1957（昭和32）年に発足させている。地元の大森小学校では1972年に愛護少年団を結成し、歴史学習や史跡の清掃に取り組んでいる。そもそも、鉱山の開発には環境破壊が避



清水谷製錬所跡。明治26年に建設されたが、わずか1年半で閉鎖された。だからこそ、伝統的技術の遺構が破壊から免れたともいえる。トロッコ道などの跡も残る。

けられないものだが、石見銀山ではその際に植林がなされたため、豊かな自然が育まれてきたのである。

その自然に隠された数々の遺構は一見地味なためか、世界遺産委員会に推薦された当初は登録が見送られた。見事に決定されたのは、逆にそのことが環境保護が求められている現代のよい手本になりうる、と判断されたからである。その意味でも、石見銀山には、きわめて今日的な問題が凝縮されているのだ。

取材協力 / 石見銀山ガイドの会
参考文献 / 『石見銀山～世界史に刻まれた日本の産業遺構（平凡社）』『世界遺産 石見銀山を歩く（山と溪谷社）』ほか